



〈雑録〉物價調節策ノ駁論ニ對スルフィッシャー教授ノ答辯(2)

松崎, 壽

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 20(6):975-990

(Issue Date)

1916-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00052541>



物價調節策ノ駁論ニ對スルフィッシャー教授ノ答辯（其二）

商學士 松 崎 壽

第十、フィ氏案ハ常ニ事後ノ方策タルニ過ギズ。

私案ハ現實ニ物價變動ノ生ズルニアラズンバ毫モ補正ノ作用ヲ現ハサルガ故ニ、該方策ハ常ニ六莖十菊ニ了ルベシトノ反對論アリ。成程論者ノ主張スル如ク補正作用ガ變動ニ從フテ行ハル、コトハ爭フベカラザル事實ニシテ、吾人ガ變動ノ程度ヲ豫知スルヲ得ザル限リハ、其發生以前ニ私案ノ實行ヲ期待スルハ甚ダ無理ナル註文ナリ。此點ヨリ論ズレバ私案ハ決シテ完全ナルモノニハアラズト雖モ、而カモ偶然ノ事情ヲ基礎トセル現在ノ制度ニ比シ遙ニ優良ナリト云ハザルベカラズ。或ハ論者ニヨリテハ調節策ノ實施セラレタル結果、物價ハ全ク反對ノ傾向ヲ採ルニ至リテ、調節策ハ却テ其弊害ヲ甚ダシクスルノ奇觀ヲ招クベシト論ズルモノ莫キニアラズ。然レドモ此ハ一片ノ杞憂ニシテ、彼ノ一八九六年以來ノ如キ極端ナル物價騰貴ノ時代ヲ採リテ月々私案ヲ實施シタリトセバ（詳シクハ經濟學四季雜誌第二十六卷第二號ニ掲ゲタル圖解ヲ看ヨ）十中八九ノ場合ハ論者ノ想像スルガ如キ反對ノ趨勢ヲ示スコトナク僅ニ其現象ヲ認メ得ベキ二三ノ場合ト雖モ其傾向ハ極メテ微細ナルノミナラズ、其レトモ次回ノ調節ニヨリテ直ニ補正セラレタル程ナリ。是ニ由リテ之ヲ看レバ調節ノ頗ル頻繁ニ行ハル、ニ從ヒ、始メテ安定ナル物價ノ方向ヲ誘致スルヲ得ルモノニシテ、恰モ運轉手ガ自働車ヲ疾走セシムルニ當リ屢々其錯行ヲ調整シテ安定ナル進路ヲ採ルト其理ヲ異ニス

ルモノニハ非ルナリ。

第十一、フィ氏案ハ「バーセント」ノ物價ノ變動ヲ「バーセント」ノ弗ノ重量ノ増減ニヨリテ確實ニ補正シ得ベシト假想ス。

予ノ説明ノ不充分ナリシ爲メカ、或論者ハ私案ガ各調節毎ニ物價指數ノ「バーセント」ノ増加ニ對シテ、弗ノ重量ノ「バーセント」ノ増加ヲ要求スルモノナリトノ誤レル見解ヲ懷キタルガ如シ。然レドモ實際私案ノ要求スル所ハ之ニ異リ、各調節毎ニ當初ノ平準ヲ超過セル指數ノ「バーセント」ノ膨脹ニ對シテ弗ノ重量ヲ「バーセント」増加セシメントスルニ在リトス。

要スルニ右ノ誤解ヨリシテ私案ノ實效ヲ期センニハ、弗ノ「バーセント」ノ増加ハ常ニ正シク物價指數ノ上ニ「バーセント」ノ變化ヲ惹起セザルベカラズトノ推論ヲ案出シテ私案ヲ非難セル者アリト雖モ、此駁論ハ已ニ前提ノ誤レルモノナルヲ以テ其結論モ亦正鵠ヲ得ザルヤ勿論ナリ。今少シク反對論者ノ蒙ヲ啓キ、併セテ予ノ考案ガ如何ニ正確且迅速ニ指數ノ變動ヲシテ當初ノ平準ニ復歸セシムルノ作用ヲ爲スヤヲ明カニスル爲メ次ニ一ツノ數字の實例ヲ示スベシ、即チ或期日ニ私案ヲ實施シ、其日ニ於ケル物價指數ヲ一〇〇「バーセント」即チ平準トナシ、其レヨリ一箇月毎ニ「バーセント」宛永續的ニ物價ノ騰貴スルモノト假定セヨ。然ラバ第一箇月ノ末ニハ右ノ騰貴ニヨリ指數ハ一〇一「バーセント」トナルガ故ニ、當初ノ平準ヲ超過セル「バーセント」ノ膨脹ハ正ニ弗ノ重量ヲ増加スベキ割合ナリ（此場合ニハ當初ノ平準以上ニ指數ノ超過セル割合ハ弗ノ重量ノ増加率ト全ク相應ス）。依ツテ弗ノ重量ヲ「バーセント」増加シタルニ此方策ハ確實ニ「バーセント」ノ物

價變動ヲ補正スルヲ得ズシテ、僅ニ二分ノ一「パーセント」ヲ調整セルニ過ギズトセバ、第二箇月ノ末ニ於ケル物價平準ハ一〇一「パーセント」ヨリ補正セラレタル二分ノ一「パーセント」ヲ減ジ、之レニ其月ノ騰貴率一「パーセント」ヲ加ヘテ總計一〇一「パーセント」二分ノ一トナルベシ（即チ $101\frac{1}{2}$ ）。

右ノ狀態ニ於テモ弗ヲ増加スベキ割合ハ當初ノ平準以上ノ額ナルヲ以テ、乃チ一「パーセント」二分ノ一ナリ（實際數字上ノ騰貴ハ二分ノ一「パーセント」ニ過ギザレドモ）。隨ツテ弗ノ重量ハ一「パーセント」二分ノ一（二分ノ一「パーセント」ニアラズ）増加セラル。然ルニ右ノ加重ノ結果ハ四分ノ三「パーセント」ヲ調整セラル、ニ止マレリトセバ、第三箇月ノ末ニ於ケル物價平準ハ前ト同理ニヨリ $101\frac{1}{2} + 1$ 即チ一〇一「パーセント」四分ノ三トナルベシ。茲ニ於テ乎、當初ノ平準以上ノ超過ハ一「パーセント」四分ノ三（實際ノ騰貴ハ四分ノ一「パーセント」ニ過ギザレドモ）トナルガ故ニ、弗ノ重量ハ更ニ一「パーセント」四分ノ三ヲ増加セラル、ナラム。斯クテ同一ノ徑路ニヨリ第四箇月ノ末ニ於ケル物價平準ハ $101\frac{1}{2} + 1 + 1$ 即チ一〇一「パーセント」八分ノ七（實際ノ騰貴ハ僅ニ八分ノ一ニ過ギザレドモ）トナルベク、第五箇月ノ末ニ於ケル結果ハ一〇一「パーセント」十六分ノ十五（實際ノ騰貴ハ僅ニ十六分ノ一ニ過ギザレドモ）トナルベキナリ、以上ノ如キ假定ニ從ヘバ物價ノ平準ハ結局一〇一「パーセント」ニ達スルコト莫キノ理ナリト云ハザルベカラズ。

斯クシテ數年ヲ經、私案ノ實施ナキ場合ニ物價ノ平準ガ五〇「パーセント」騰貴スベキ割合ナリトセバ、私案ノ實施セラル、場合ニハ弗ノ重量ハ一〇〇「パーセント」五〇「パーセント」ニアラズ）ノ

増加ヲ看ルベシト雖モ、而カモ該期間ヲ通ジテ物價ノ平準ハ二「バーセント」以內ノ變動ヲ惹起スルニ止マルベシ。サレバ弗ノ重量ニ於ケル一「バーセント」ノ増加ガ的確ニ一「バーセント」ノ物價騰貴ヲ補正スベシテフコトハ私案ノ要件ニハアラズシテ、單ニ當初ノ平準ニ接近セシムルノ作用ヲ現ハスコトガ必要ノ要件タルナリ。即チ一「バーセント」ノ弗ノ加重ハ四分ノ一「バーセント」若クハ其以下ノ調節ヲ爲スニ過ギズトスルモ、其集積の結果ハ必ズヤ大ニ其狀態ヲ改善スルノ效アルベキナリ尙此問題ニ關シテハ第五項ノ下ニ掲ゲタル數字的事例ヲ參照セヨ。

第十二、フィ氏案ハ多クノ利益ヲ收メントスル誘惑トナルベシ。

此反對論ハ一弗ニ就キ二五・八「グレーン」以上ノ割合ヲ以テ輸納セラレタル地金ノ超過額即チ造幣料(Seigniorage)ニ當ルベキモノヲモ鑄造シテ發行セントスルノ絶エザル誘惑アリト云フニ在リ。而シテ或論者ハ此造幣料ノ流用ハ引換準備金ヲ蕩盡スルニヨリテ私案ヲ破壞スルノ虞アリト論ジ、「ファイナンシアル、コロニクル」記者ノ如キハ金貨ノ濫造ハ私案ノ實施セラレザル場合ト等シク、多額ノ貨幣ヲ流通場裡ニ投入シテ結局調節策ヲ無効ニ了ラシムベシト論ゼルヲ看ル。

然レドモ政府ガ通貨ノ發行額ニ對シテ充分ノ準備金ヲ保持セバ、其結果ハ必ズシモ引換資金ニ窮スルガ如キコトハアラザルベシ。之ニ反シテ單ニ政府自身ノ利益ノ爲メニ叙上ノ造幣料ヲモ流用スルガ如キコトアランカ、斯ル計畫ハ必ズヤ蹉跌ヲ招カザルヲ得ズ。何トナレバ流通場裡ニ新タナル金貨ヲ投入スルニ於テハ直ニ過剰通貨ノ横溢ヲ來タシ、金貨又ハ金貨證券ハ續々國庫ニ提供セラレテ地金ト引換ヘラル、ニ至ルベク、竟ニ貨幣ノ鑄造額ハ元ノ數量ニ復歸スルモノナリ。此鑄貨ノ自

然的復歸ハ極メテ重要ナル點ナレドモ動モスレバ看過セラル、ガ如シ。今論者ノ說ヲ駁スルニ當リ先ヅ其衝點ヲ明カニセンニ、例ヘバ弗金貨ヲ得ルニハ二五・八「グレーン」ノ代リニ五一・六「グレーン」ノ地金ヲ輸納スルヲ要ストシ、即チ輸納地金ノ半額ガ造幣局ノ手許ニ保留セラル、程造幣料大ナリト假定スベシ。而シテ流通場裡ニ在ル弗金貨ハ五億弗ニシテ、國庫ニハ輸納額ノ増加ニヨリ一億弗以上ノ地金ヲ保有スルモノトシ、尙假リニ物價調節策ノ實施セラル、コト莫カリセバ、此等全部ノ金ガ流通場裡ニ入りテ總計十億弗ニ達スト假定セヨ。反對論者ハ造幣料ノ濫用ハ此十億弗ノ金貨ヲ流通場裡ニ引戻スコト、ナルベキガ故ニ、二四・八「グレーン」ヲ五一・六「グレーン」ニ増加スルモ果シテ奈何ナル效果ヲ齎スベキヤト論ゼリ。

此駁論ハ新考案ノ下ニ於テ、金ノ價格ガ反對論者ノ想像スルガ如キ通貨ノ膨脹ヲ防止スルヤウ迅速ニ低下スベシトノ重要ナル事實ヲ看過スルモノナリ。即チ造幣料ノ濫用ハ必ズヤ通貨ノ膨脹ヲ惹起スベキガ故ニ、夫ハ地金價格ノ低落トナリ、又其價格ノ低下ハ金ヲ工藝用ニ導クコト、ナルベシ而シテ其流入ハ次ノ二途ノ孰レカ一方若クハ雙方ヲ採ルモノニシテ、即チ（一）工藝者ハ直接鑛業者ヨリ地金ノ供給ヲ仰ギテ金ノ流通場裡ニ入ルヲ抑制スルコト（二）工藝者ハ金貨又ハ紙幣ヲ提供シテ政府ヨリ地金ヲ購入スルコト是ナリ。サレバ政府ガ地金對金貨ノ引換割合ヲ増加シテ其超過額ヲ流用スルコト甚ダシキニ從ヒ、益々金ノ價格ハ下落シテ地金引出ノ要求ヲ愈々激増セシメ、結局貨幣流通額ハ緊縮シテ物價ノ騰貴ヲ促シ延テ弗ノ重量ノ増加ヲ停止セシムベシ。是レヲ以テ論者ノ想像スルガ如キ通貨ノ無制限ナル膨脹ナキハ勿論、十億弗ノ通貨ガ依然流通場裡ニ止マルガ如キ虞ハ全

ク無之シト云フベキナリ。然ルニ若シ斯ル場合ニ調節策ノ實施セラル、コトナシトセバ、地金價格ノ下落ハ工藝用ニ流入スル部分ヲ一層巨額ナラシメ或ハ海外ニモ流出セシムルニ至ルベシ。

要スルニ政府ガ弗ノ重量ヲ増加シテ間斷ナク利益ヲ收メントスルモ、到底不可能ニシテ其企圖ハ自繩自縛ニ了ルノ外莫カルベシ。然ルニ若シ政府ガ毫モ斯ル地金價格低落ノ影響ニ顧慮スル所ナクシテ其企圖ヲ遂行センカ、其結果ハ引換準備金ヲ蕩盡シテ調節策ヲ拋棄セシムルニ至ルヤ勿論ナリ然レドモ斯ルコトハ常識ヲ以テ判斷シ難キ特異ノ事例ニシテ固ヨリ常習ト爲スニ足ラズ。普通ノ場合ニハ調節策其モノガ叙上ノ如ク自制ノ限度ヲ有スルヲ以テ、彼ノ綠背紙幣 (Greenback) ニ對スル現在ノ準備金、金貨證券 (此證券ハ近キ將來ニ於テ銀行券ニ變換セラルベシ) ニ對スル同額ノ準備金聯邦準備制度ノ實施ニヨリテ生ズル準備金等ヲ保有スルヨリモ、私案ノ下ニ於テ政府ガ其引換準備金ヲ流用スル方或限度内ニ於テハ寧ロ危險ノ度少シト云フモ不可ナキ程ナリ。手近キ實例ヲ示セバフイリツピン竝ニ印度政府ハ決シテ國庫ノ急ヲ援フガ爲メニ、「ベツ」又ハ「ルビー」ノ準備金ヲモ鑄造シテ再發行スルガ如キ危險ヲ冒スコトナカリキ。蓋シ若シモ政府ニシテ之ヲ濫用センカ、忽チ爲替相場ノ變動ヲ惹起シ、鑄貨ハ國庫ニ復歸スルヲ以テナリ。

現在ノ本位制度ニ於テハ動モスレバ通貨膨脹ノ危險アレドモ、私案ヲ採用セバ其危險ハ自然ニ消滅ニ歸スベキヤ疑ナシ。要スルニ該考案ハ二個ノ教訓ヲ含ムモノトス、其ノ一ハ物價調節策ノ目的ガ物價ノ安定、貨幣購買力ノ不動ヲ維持スルニ在ルコト汎ク認識セラル、ニアラズンバ新考案ハ採用セラレザルベシ、其ノ二ハ私案ガ物價理論ノ實物教育ト成ルコト是ナリ。即チ政府ガ絶エズ割合

ヲ變更シテ地金ノ引換ヲ爲スコトハ其眞ノ目的ヲ熟知セザル公衆ノ間ニ一時疑惑ヲ惹起スベキモ、其引換率ガ公示セラル、物價指數ニ固着スルコト明瞭トナルニ至ラバ自ラ該制度ノ何タルヤヲ示ス、ノ説明トナルナラム。要スルニ現在ノ如キ物價ノ安定ヲ圖ルノ方策モ亦其機關モ存セザル制度ニ於テハ通貨ノ膨脹ハ常ニ極端ニ進ムノ虞ナキニ非ルナリ。

第十三、フイ氏案ハ慥ニ不滿ト紛議トヲ招クベシ。

此心配ハ全ク杞憂ニ過ギズ。若シモ私案ガ從來ノ物價指數本位制ト同ジク或定額ノ負債ヲ辨濟スルニ當リ、物價指數ニ準據シテ實際ニ支拂フ貨幣ノ額ヲ或ハ増加シ、或ハ減少スルニアリトセバ論者ノ主張モ一應首肯スルニ足ルモノナキニアラズ。何トナレバ斯ル狀態ノ下ニ在リテハ債權者ハ常ニ多額ノ貨幣ヲ受領セントシ、債務者ハ之ニ反シテ少額ノ貨幣ヲ返濟センコトヲ主張スベキガ故ニ必ズヤ多少ノ紛議ト爭論トヲ喚起セズンバ已マザルベシ。然レドモ物價指數本位制ヲ斯クノ如ク形式的ニ採用セズシテ貨幣ノ實質其物ニ適用セリトセバ、債權者モ債務者モ此制度ニヨリテ如何ナル影響ヲ享クルヤヲ毫モ察知セザルベク、恰モ現行制度ノ下ニ於テ金ノ騰貴ガ彼等ノ利害ト如何ナル關係アルヤヲ認識セザルト同一轍ナラム。是レ一般世人ニ探リテハ「一弗ハ一弗ナリ」(A dollar is a dollar)テフコトハ疑フベカラザル事實ナレバナリ。

嘗テジェヴォンスノ唱道シタル物價指數本位制ノ下ニ於テ生ズベキ苦情ト、私案ノ實行ニヨリテ起ルベキ苦言トノ關係ハ恰モ直接税ト間接税トノ下ニ於テ現ハル、愁訴ノ比較ニ髣髴タリ。納税者ハ直接税ノ負擔ヲ感ズルコト痛切ナレドモ、間接税ニ對シテハ其苦痛ヲ感ゼザルコト多ク、經濟學

者ト雖モ間接税ノ弊害ヲ正當ニ推測スルハ極メテ困難ナル程ナリ。實ニ我米國ニ於テ一般消費者ガ高率ノ關稅ヲ非難スルニ至リシ迄ニハ數世紀ノ長年月ヲ要シタルモノニシテ、而カモ最近ニ及ビ之ニ對スル怨嗟ノ聲俄然高潮ニ達スルニ至リシハ全ク生計費ノ膨脹ニ起因セリト云ハザルベカラズ。換言スレバ生計費膨脹ノ原因ガ誤リテ關稅ニ轉嫁セラレタルガ故ナリトス。

若シ吾人ガ物價調節策ヲ直ニ採用セリトスルモ、他ノ考案乃至本位制度ヲ採用セル場合ニ比シ世人ノ之ニ對スル注意ノ極メテ輕微ニ止マルコトハ殆ンド疑フノ餘地ナキ所ニシテ、恐ラク工藝者及ビ鑛業者ノ外ハ法定價格ノ變動ニヨリテ大ナル利害ヲ感ズルコト莫カルベシ。此問題ニ關スル最モ適切ナル實例ハフィリッピン人又ハ印度人ガ金爲替本位制ノ真相ヲ知レルト否トニ拘ハラズ、該制度ノ採用ニヨリテ貨幣ノ購買力ノ上ニ起レル重要ナル變化ニ就テ何等ノ注意ヲ拂ヒシコトナク、又現在ノ貨幣ノ購買力ト銀本位制當時ノ購買力トノ比較ニヨリテ何等ノ不滿モ失望ヲモ懷カザリシコトニシテ、予ハ今是レ以上更ニ多クノ事例ヲ引用スルノ必要ヲ感ゼザルナリ。想フニ一般世人ニシテ現在ノ金本位制ノ下ニ在リテ實質上購買力ノ減縮シツ、アリシコト、殊ニ金ノ下落ガ債權者及ビ債務者ノ利害ニ如何ナル影響ヲ與ヘタリシヤ、將タ又與フルコトノ可能ナリヤヲ正當ニ知悉セル者ハ極メテ稀ナルベシ。吾人經濟學者ハ這般ノ關係ヲ闡明シ、例ヘバ過去十五年間ニ貯蓄銀行ノ預金者ガ其元本タル貨幣價值ノ下落ニ因リテ實ハ利子ヲ欺瞞セラレ居タルコトヲ物價指數ニヨリテ明瞭ニ計算スルヲ得レドモ、預金者自身ハ毫モ其實實ヲモ亦其原因ヲモ與リ知ル所ナシ、吾人ハ又同一ノ徑路ニヨリ各種債券ノ所有者ガ實際ニ於テハ全ク利子ヲ得ルコトナクシテ單ニ元本ヲ蠶食シツ、

アリシコトヲ指摘シ得ルモ『一弗ハ一弗ナリ』ト確信セル世人ハ吾人ノ云フガ如キ斯卡ル奇怪ナリト看ユル現象ニ就テハ夢想ダモセズ。若シ又假リニ物價騰貴ノ不利ナル結果ヲ變分認ムトスルモ、其レニ就テノ不平ハ鑛業者、預金銀行等ニ向ツテ發セラレズシテ却テ不遇ナル中産者階級、冷藏倉庫「トラスト」、關稅、職工組合等ニ對シテ傾注セラル、ナラム。

要スルニ世人ガ今日ノ本位制度ノ下ニ於テ、十五年前ニ比シ約五〇「パーセント」ニ達スル金ノ低落ニヨリテ享ケタル種々ノ影響ヲ認識スルニアラズンバ、予ノ提唱スル物價調節策ガ他ノ諸制度ニ比較シテ僅カニ一乃至五「パーセント」ノ利子ヲ失フニ過ギズト説明スルモ恐ラク首肯スル者アラザルベシ。普通債務者階級ハ債務ノ辨濟ヲ有利ナラシムルノ手段トシテ復本位制又ハ銀貨自由鑄造ノ制度ヲ賞揚スルモ、債權者階級ハ之ニ反對スルヲ看ル。然レドモ此種ノ議論ハ本位制度ヲ變更セントスルノ問題ニシテ、之ヲ變換セズシテ改良ヲ施サントスルノ問題ニハアラズ。而シテ後者ニ就テハ債權者モ債務者モ共ニ云爲スル所ナク又爾カスルノ能力ヲモ有スルコト莫シ。蓋シ新本位制度ヲ樹立スルハ極メテ困難ナル事業ニシテ、一度之ヲ樹立スルモ其維持ニ就テハ尙種々ノ豫想シ難キ問題ノ發生ヲ免レザルガ故ニ、寧ロ斯ル根本の方策ヲ講ズルヲ避ケ現制度ヲ改良シテ可及的完全ノモノト爲スノ捷徑ナルニ如カザルナリ。

第十四、フイ氏案ハ嘗テ經驗セラレタルコトナシ。

此批難ハ正ニ事實ナリ。然レドモ私案ハ彼ノ英國ニ於テ案出セラレタル印度通貨ヲシテ金ニ對スル平準ヲ維持セシメントセシ金爲替本位制ト其作用ヲ同ウスルモノニ外ナラズ。勿論私案ハ其真髓

ニ於テハ金爲替本位制ニ比シ、左迄著シキ刷新ヲ加ヘタルモノニハ非ズト雖モ其矯正セントスル弊害ニ至リテハ印度ノ其レニ比シ寧ロ甚大ナリト云ヒ得ベキガ如シ。一八九三年金爲替本位制ノ考案ガ始メテ印度ニ於テ採用セラレタル當時ニハ單ニ一時造幣局ヲ閉鎖シ「ルビー」銀貨ヲシテ其地金ノ價值ヨリ獨立セシメ、且金ト引換ヘラレザル純粹ノ名目貨幣(Fiat money)タラシムルニアリキ。斯クシテ保守主義ノ英國ハ印度トノ爲替相場ノ變動テフ比較的些々タル不便ヲ除去センガ爲メニ、印度ノ通貨ヲシテ施政者ノ隨意ニ多少其價值ヲ左右シ得ベキ一時的不換ノモノタラシメ、依テ以テ予ノ現在ノ考案ニ比シ一層批難ノ餘地アル制度ヲ建設セリ。然ルニ此制度ハ毫モ貨幣制度ヲ紊亂セシメザリシノミナラズ、却テ銀貨國ガ其貨幣ヲ廢棄スルコトナクシテ、金本位制ノ利益ヲ享受シ得ベキ金兌換ノ制度ヲ建設スルコトヲ得タルナリ。而シテ當初疑問ノ眼ヲ以テ批評セラレタル金爲替本位制ノ發展ハ獨リ印度ニノミ止マラズ、竟ニフィリッピン、バナマ、海峽植民地、メキシコ、暹羅等ニモ波及シテ同様ノ制度ヲ喚起セシムルニ至レリ。予ハ該制度ヲ以テ貨幣ノ發展史上ニ於ケル最も大ナル階程ノ一ナリト信ズ。實ニ予ノ考案ハ金爲替本位制ト同一ノ理論ノ上ニ樹立セラレタルモノニシテ而カモ其安定ノ度ハ一層大ナリト云フヲ得ベシ。何トナレバ私案ハ總テノ貨物ヲ以テ貨幣價值ノ安定ヲ圖ルモノニシテ、金爲替本位制ノ如ク單ニ貿易關係ヲ有スルニ過ギザル他國ノ貨幣ヲ以テ一國ノ貨幣價值ヲ安定ナラシメントスルモノニハ非ルナリ。

予ノ信ズル所ニシテ大誤ナシトセバ、此駁論ハ實ニ私案ニ對スル唯一ノ有力ナル反對ニシテ、又現在ノ狀態ヲ變轉セシムルニ就テノ根本的反對論ナリ。然レドモ此ハバンチーノ謂ヘル『如何ナル

モノニテモ新規ナルモノハ劣惡ナリ』(Anything new is scandalous) トノ言ノ如ク單ニ新ラシキ事物ニ對スル因襲ノ偏見ニ過ギズ。保守的論者ハ或事物ガ試験的ノモノナルガ故ニ其試験ヲ爲スヲ好マズト云フガ如キ固陋ナル主義ヲ墨守セルヲ以テ、彼等ガ予ノ考案ニ對シテ『須ク在來ノ儘ニ拋棄セシメ』(Let well enough alone) 『吾人ノ熟知セザルモノニ奔ルヨリモ寧ロ固有ノ病根ヲ保持セシメ』(Let us rather bear those ills we have than fly to others that we know not of) トノ反對論ヲ寄スルモ決シテ不可思議ニハアラザルナリ。總テ保守主義者ハ試験セラレザル或種ノ新考案ニ對シテ始メヨリ同意ヲ表スルコトハ極メテ稀ナレドモ、若シ該考案ニシテ充分ノ試験ヲ經、又確定制度トナリタル後ニ於テハ彼等ハ流水ノ低キニ就クガ如ク容易ニ從前ノ主張ヲ拋棄シテ、却テ新考案ノ最モ忠實ナル祖述者トナルニ至ル者ナリ。此事實ハ我米國ノ貨幣及銀行制度ノ變遷ニ於テ吾人ノ屢々散見シタル所ナリ。

結 論

予ハ此物價調節策ヲ發表シテ以來種々ノ方面ヨリ凡百ノ論難攻撃ヲ享ケタリ。然レドモ私案ハ今日ニ至ルモ尙依然無疵ニシテ毫モ致命的攻撃ヲ受ケザリシコトヲ告白セザルヲ得ズ。想フニ將來ニ在リテモ決シテ異論ハ尠ナカラザルベシ。然レドモ予ハ過去ニ於テ多クノ質問ニ答ヘタル如ク、尙將來ニ於テモ大ニ質問ヲ歡迎スルモノナリ。

予ノ經驗ニ於テ最モ愉快ニ堪ヘザルハ、反對論者ガ私案ヲ研究スルコト深キニ從ヒ其誤想ヲ解明シテ益々の確ニ予ノ見解ニ接近シ來ルコト是ナリ。予ハ此種ノ實例ノ多クヲ有セルガ、殊ニ其多數

ハ私信ニ於テ其疑問ヲ解決シ得タルガ如シ。最初予ノ考案ニ反對シテ堂々駁論ヲ公ケニシタル某經濟學者ハ其後對話ニ於テ予ガ逐一彼レノ謬見ヲ道破シタル爲メ大ニ覺ル所アリ。終ニ私案ニ賛同ノ意ヲ表スルニ至レリ。尙其他ニモ當初ハ徹頭徹尾反對ヲ唱ヘタル論者ニシテ、今日ニテハ最早其疑問ノ大部分ヲ解決シテ僅ニ一小部分ニ就テ異論ヲ有スルニ過ギザル者モ亦少ナカラザルナリ。タウシツグ教授曰ク『吾人ノ先ヅ承認セザルベカラザルコトハ其考案ガ若シモ非常ノ長年月間確實ニ實施セラル、ナラバ、其豫期セル結果即チ物價ニ於ケル永續的ノ顯著ナル騰貴ヲ防止スルノ效アルベシ。勿論提案者ノ希望スルガ如キ圓滑平坦ナル結果ヲ成就スルヤ否ヤハ聊カ疑問ナリト雖モ、兎モ角叙上ノ條件即チ長期ニ互リテ確實ニ實行セラル、コトガ必要ナル要件ナリ』ト、キンレー教授曰ク『予ハ其レニ就テ論理上ノ瑕疵ヲ發見スルヲ得ズ』ト、蓋シ氏ノ反對ハ専ラ物價指數本位制ニ對スルモノ、如シ。

想フニ反對論者ノ有力ナル駁論アルニモ拘ハラズ、理論上眞ノ權威ハ反對論者ノ側ニアラズシテ予ノ考案ノ側ニ在ルコトハ掩フベカラザル事實ナリ。今此事實ヲ證明センガ爲メニ多數ノ賛成論者ノ内ヨリ著名ナル人士ヲ擧ゲンニ經濟學者ニ在リテハハッドレー、ジェー・ビー・クラーク、ジェー・エム・クラーク、ミツチエル、バーソンス、エツヂウガース、マーシャル、ケーンス、ヒグー、ローヤル・メーカー、アドルフ・ランドリー、アキレ・ローリア等アリ、思想界及ビ政治界ニ於テハダヴィッド・バルボア、ポール・ウアーブルグ、ファールウエル、大統領ウイilson等ノ耆宿アリ。吾人ガ單ニ頭數ニヨリテ賛否ノ論者ヲ計上セバ經濟學者以外ニ於テハ意見ヲ發表シタル者ノ過半ガ私

案ニ反對ノ意ヲ表明セリ。新聞紙上ニ現ハレタル論說ニ就テ云ヘバ、七箇ノ内賛成論二、反對論三賛否ノ意見ヲ表セザルモノ二ノ割合ナリ。從ツテ予ノ提案ハ學界ニ於テヨリモ寧ロ實際界ニ多數ノ反對論者ヲ有スル次第ナリ。

斯クノ如ク予ノ考案ハ實際界ニ於テ同意者少キノ外觀ヲ呈スレドモ、此ハ毫モ遺憾トスルニ足ラズシテ予ハ可及的經濟學者ノ承認ヲ得ンコトヲ希望スル者ナリ。元來價值本位制度ノ觀念ハ純然タル學究的ノ問題ナレドモ、一般經濟學者ガ之ヲ確信シ又實際家ガ學者ノ所信ヲ認識スルニ及ビテ始メテ通俗ノ問題トナルナリ。隨ツテ此種ノ問題ニ關シテ新考案ヲ發表セントスル者ハ先ヅ學者ノ同意ヲ得ンコトヲ努メザルベカラズ。是レ予ガ經濟學者ノ意見ニ重キヲ置ク理由ナリ。予ハ私案ヲ研究中之ト同一ノ理ヲ首唱セルノ名譽ガ予ニ屬セズシテ、ニユー・コーム教授ニ歸スベキコトヲ知リテヨリ一層臆面ナク私案ヲ鼓吹スルニ至レリ。兎モ角他ノ有力ナル學者ニ先鞭ヲ附セラレ居ルトノ事實ニヨリ、予ハ自己ノ立場ヲ離レテ該案ヲ賞揚シ且多數ノ經濟學者ニ向ツテ其效果ニ關スル研究ヲ推獎スルノ勇氣ト機會トヲ獲得スルニ至レリ。予ガ衷心學者ノ努力ヲ希望スルノ一事ハ現在ノ弗貨ヲ其儘使用スルニヨリテ、容易ニ斯ル改良ヲ實現シ得ベキコトヲ世人ノ腦裡ニ日常茶飯事ト爲サシメタキコト是ナリ。二十年前ニハ物價指數ノ理論ニ對シテモ非常ノ反對アリシガ、斯ル思想ハ何時シカ消滅シテ現今ニテハ之ニ對シテ何等ノ疑ヲモ插マザルニ至レリ。蓋シ弗ノ價值ヲ安定ナラシムル予ノ考案モ亦物價指數ト同一ノ運命ヲ開拓セザルベカラズ。既ニ今日迄ニ得タル多クノ權威アル裏書ニヨリテ推斷セバ、私案ガ將來多數ノ信奉者ヲ得テ速ニ實行ノ舞臺ニ入ルベキコトハ決シテ不

可能ニハアラザルベシ。唯一切ノ解決ハ機會ノ到來ヲ待ツベキノミ、例ヘバ今次ノ戦争後ニハ恐ラ
ク國際共同主義(Internationalism)ノ流行ヲ看ルナラム。果シテ然ラバ斯ル機運ニ乗ジテ叙上ノ裏書
ヲ有スル私案ハ各國施政者ノ眞面目ナル注意ヲ購フニ至ルベキナリ。(完結)

關 係 書 目

次ニ掲ゲタル書目ハ物價調節策ノ説明又ハ批評ニ關シ一九一四年末迄三世ニ公ニセラレタル單行本又ハ新聞雜誌ノ論文三百
四十四(内三百五ノ新聞)ノ内ヨリ最も重要ナルモノヲフィッシュ氏自身ノ拔萃セルモノナリ。但シ此内ニハフィッシュ氏案ニ直接ノ關係ナ
クレドモ、已ニ今ヨリ二三十年前該案ト同一ノ理ヲ唱道シタルシモシ・ニュー・エーム及ピア・ニュー・リ・ソ・ソ・イリアム兩氏ノ論文
ヲモ併記シタリ。

Simon Newcomb, The Standard of Value, North American Review, Vol. CXXIX, No. CCLXXIV, 1879, pp. 234—237.

Aneurin Williams, A Fixed Value of Bullion Standard, Economic Journal, Vol. II, June, 1892, pp. 280—289. Discussion by

Sir Robert Giffen, Fancy Monetary Standards, *ibid.*, pp. 463—471; reply by Aneurin Williams, pp. 747—749.

Irving Fisher, The Purchasing Power of Money, 1911, Ch. 13.

O. M. W. Sprague, Fisher's Purchasing Power of Money, Quarterly Journal of Economics, Nov. 1911, pp. 148—151.

I. Fisher, International Conference Regarding the Cost of Living, Independent, Vol. LXXIII, No. 3330, Sept. 26, 1912, pp.
700—706.

Editorial, Commercial and Financial Chronicle, Oct. 5, 1912. Replies by I. Fisher & further discussion, Oct. 26, & No. 16,
1912.

I. Fisher, Standardizing the Dollar, New York Times, Dec. 22, 1912.

I. Fisher, A More Stable Gold Standard, Economic Journal, Vol. XXII, No. 88, 1912, pp. 570—576.

William Blackman, The Increasing Cost of Living, Its Cause and Cure, Rollins College Bulletin, Dec., 1912.

Lucien March, Un Projet de Stabilisation des Prix, Communication à la Société de Statistique de Paris, le 15 Jan., 1913, re-
printed from its journal, pp. 10—24. Discussion by Edmond Théry, G. Roulleau, Aug. Deschamp, Adolphe Landry, L.

March, I. Fisher.

- I. Fisher, A Compensated Dollar, *Quarterly Journal of Economics*, Vol. XXVII, No. 2, 1913, pp. 213—235. Appendices, pp. 385—397.
- I. Fisher, Standardizing the Dollar, *American Economic Review*, Supplement, Vol. III, No. 1, 1913, pp. 20—28. Discussion by N. C. Murray, Albert C. Whitaker, Willard C. Fisher, O. M. W. Sprague, B. M. Auderson, R. R. Bowker, E. W. Kemmerer, & J. Fisher, *ibid.*, pp. 29—51.
- David Kinley, Objections to a Monetary Standard Based on Index Numbers, *American Economic Review*, Vol. III, No. 1, 1913, pp. 1—19.
- Augusto Graziani, Di una nuova proposta per rendere piu stabile il valore della moneta, *Reale Istituto d'Incoraggiamento di Napoli*. Nota letta tornata del 6 Marzo 1913.
- Peyton R. Anness, The Compensated Dollar, *Yale Scientific Monthly*, Mar., 1913.
- Corrado Gini, L'equazione dello scambio e il potere di acquisto della Moneta, *Rivista Italiana di Sociologia*, Rome Anno XVII, Fasc II, 1913.
- F. W. Taussig, The Plan for a Compensated Dollar, *Quarterly Journal of Economics*, Vol. XXVII, No. 3, 1913, pp. 401—416.
- F. Zeuthen, Irving Fishers Forslag til Prismiveauets Stabilisering, *National-ökonomisk Tidskrift*, Copenhagen, Hefte 4, Jul-Aug., 1913, pp. 350—364.
- E. B. Wilson, Review of the Purchasing Power of Money, *Science*, May 16, 1913. pp. 761—763.
- I. Fisher, What an International Conference on the High Cost of Living Could Do? *Institut International de Statistique*, Vienna, XIve Session, Rapports, No. 25, Sept., 1913.
- J. M. Clark, Possible Complications of the Compensated Dollar, *American Economic Review*, Vol. III, No. 3, 1913, pp. 576—588.
- E. M. Patterson, Objections to a Compensated Dollar, *American Economic Review*, Vol. III, No. 4, 1913, pp. 863—875.
- I. Fisher, La Hausse Actuelle de la Monnaie, du Crédit et des Prix, Comment y Remédier, *Revue d'Economie Politique*, 1913, pp. 419—434.

I. Fisher, De *La Nécessité d'une Conférence Internationale sur le Coût de la Vie*. *La vie Internationale*, Brussels, Tome III, Fasc. 12, 1913, pp. 295—311

(7. M. Boissevain, *Fen Ideale Warde-Standard?* *De Economist*, The Hague, 1913, pp. 441—473.

David Davidson, Irving Fishers förslag att reglera penningens köpkraft, *Ekonomisk Tidskrift*, Stockholm, Häft. 3, 1913, pp. 88—107.

W. Eggenschwiler, Review of article in *American Economic Review*, Supplement, March, 1913, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 37, Heft 1, 1913, pp. 258—264.